

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」

これは最も古い時代に作られた讚美歌、キリスト賛歌をパウロが手紙のこの部分に引用したものだと言われています。ここで歌われていることはとても重要なことで、キリスト教の歴史でいいますと、讚美歌 21 に、使徒信条と一緒に載っているニケア・コンスタンティノープル信条がありますが、あれをへて、カルケドン信条一信条というのは、わたしたちが何をどのように信じているのかというキリスト教のエッセンスをまとめて告白したもの、これを教えの筋道・理（ことわり）という意味で「教理」といいますが、これにキリスト教というのはどういう宗教で、わたしたちは何を信じているのかということが明らかにされている。ふだん使徒信条を告白するのはそういう意味があるのですが、この使徒信条以前に、ニカリア信条が出され、そこで言葉が足りなかった部分がカルケドン信条という5世紀に出されたもので補われたのです。そこで、キリスト・イエスは「まことの神にして、まことの人」と教義が確立する。そこにいたる根っこと言いますか、オリジナルと言いますか、讚美歌でこのように告白されていたことが、最終的に教理としてまとめあげられ、告白されてゆく。キリスト教とは何か、イエスとは何者であるかを喜びのかたちで言い表した非常に貴重で、大切な告白になっています。フィリピの信徒への手紙の価値をワンランク押し上げている貴重な資料であり、パウロはそれを

引用しながら、フィリピの信徒たちに向かって、あなたがたもそれに倣って、何事も利己心や、虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え。めいめい自分のことだけではなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさいと勧めるのです。キリスト・イエスがそうであったのだから。あなたがたもそれに倣いなさいと言う流れです。今回、手元にあった幾つかの聖書でこの有名な個所を比較してみました。カトリック教会のフランシスコ会訳聖書は、キリスト・イエスが抱いておられたのと同じ思いを抱きなさい、と断って

「キリストは神の身でありながら、神としてのあり方に固執しようとはせず、かえって自分をむなしくして、僕の身となり、人間と同じようになられました。その姿はまさしく人間であり、死に至るまで、十字架の死に至るまでへりくだって従う者となられました」と訳しています。つづいて分かりやすさ重視のリビングバイブルの訳ですと

「キリストは神であられるのに、神としての権利を要求したり、それに執着したりなさいませんでした。かえってその偉大な力と栄光を捨てて奴隷の姿をとり、人間と同じになられました。そればかりか、さらに自分を低くし、犯罪人と同じようになって十字架上で死なれたのです。」となっています。言葉の正確さよりも分かりやすさを重視した分、意識に近い部分もありますが、意味はつかみやすいですね。最後に学問の成果を重視した一番新しい聖書協会訳を紹介します。

「キリストは神の形でありながら、神と等しくあることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の形をとり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」

言いたいことはつかめたと思うのですが、ここでパウロが、というより、新約聖書自体の構成がそうなっているのですが、まず4つの福音書がおかれ、イエス・キリストの福音が語られます。続いて使徒言行録がおかれ、キリストの弟子たちのエルサレムとユダヤ全土、それから地中海伝道の様子が記されます。ここを読みますとこの後に出てくる手紙の背景が分かる仕組みですね。そして書簡が21通収められて、キリストの福音によって、人格と人生と教会を形づくるためのアドバイスがされ、最後に世の終わりについてヨハネの黙示録が置かれている。何が申し上げたいかというと、福音から倫理へという道筋がしっかり立てられていることです。この場合の倫理というのは人の生きる道というよりも、救われた者が主と共に生きる信仰者としての道筋ですね。そしてその信仰者は独りで生きるのではなく、群れで生きるのです。世の中のさまざまな利害集団からいったんは切り離されて、主と共に生きる群れが誕生する。教会の言語はエクレーシア＝「主に召し集められた群れ」であり、そこで頭であるキリストに結ばれて生きる群れです。キリスト・イエスに結ばれた者たちは、ここでパウロが宣べているように、愛されたから愛することが出来る者へ。福音に出会ったから、福音の消息に従って生きることが求められている。福音が与えられてわたしたちの実践が始まる。はじめに実践があるのではない。「何事も利己心や虚栄心からするのではなく」と断りをパウロが入れたのは、わたしたちがいつも自分を出発点として考え、自分の物差しで人を測るからです。キリストの心をわたしたちの心とせよという勧めであって、すでにキリストがわたしたちのために人となられ、十字架へと向かう服従の道を通して互いに仕えあう道を開いて下さっている。そこに一致の道が、命の道が開けている。この福音から倫理へ・律法へという順序

を確認しておきたい。これは絶対に転倒しません。神なしで生きることを願われているのではないのです。

ところで、さきほどのキリスト賛歌の言葉で、日本語に訳されたものを幾つか紹介しましたが、どれも上手く訳しきれていない個所があり、しかもそれがとても大切なので、そのことに触れたいと思います。

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」

ここで「神の身分」であったが「僕の身分」となったという個所、フランススコ訳は「神の身」であったが「人の身」とし、聖書協会訳は「神の形」であったが「僕の形」と訳した個所。それぞれ「身分・身・形」と訳されましたが、神に使われている言葉と人に使われている言葉がオリジナルのギリシア語では違うのです。その違いがうまく訳し分けられていないのですね。キリストは「神のモルフェー」であられたが、自分を無にして、「僕のスケーマ」となった、と書いてある。モルフェーとスケーマという言葉が使い分けてある。神のモルフェーと僕のスケーマ、何が違うか。簡単に言ってしまうと内側と外側の違いです。モルフェーは根源のかたち、本質としてのかたちを意味するもので、キリストが神のモルフェーであるといえ、神と深いところでその本質を同じくしているという意味です。教理確立において大議論になった三位一体につながる。ここはちゃんとモルフェーが使っている。神と等しい。しかし、その形態が変化した。人となられた。外側にまとうかたち＝スケーマが変わり、人となった。そういう言葉の使い分けがしてあるのです。

パウロはコリントの信徒への手紙 1 9章 19節以下で次のように語っている個所があります。これは今日のキリスト賛歌をへてあなたがたもこのようにと勧めるパウロの気持ちがよく判る個所ですから引用します。

19 わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。

20 ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。

21 また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。

22 弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。

23 福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

この個所に見られるように、キリスト者としての本質＝モルフェーがキリストと一致しているならば、わたしたちのスキーマを相手にあわせて変えてゆくことも相手に対する愛の業としてあり得るのです。それはキリストの愛に生かされているが故に、わたしたちキリスト者に可能とされている調和と一致への道です。それは打算によってなされる業ではありません。ここで相手にへりくだれば後で自分は上手くいくといった。相手を自分の幸福のための手段とするありかたではありません。キリスト賛歌の後半は「このため神はキリストを高く上げ、あらゆる

る名にまさる名をお与えになりました」と続きますが、これは神が自由に、主体的になさるのであり、キリスト・イエスの側からすれば「挙げられる」のであって、ここは徹底的に受け身なのです。十字架の死に至るまで従順であったというキリストの神の意志への服従は、徹底的、それこそ「底に徹する」という意味で、徹底的であり、その先は完全に神に委ねておられる。十字架の死までへりくだることが目的であって、それは手段ではなかった。死で終わりであり、その先は、完全に神の御手に御自分を委ねられた。ここにキリスト・イエスの栄光があるのです。キリスト・イエスは、ただただわたしたち人間の救いのために身を投げ出された。極みまで愛してくださり、低きに降り、刑罰としての死を十字架で死なれた。ここにすべての者が「イエス・キリストは主である」とともに賛美し、父なる神をあがめ、こころをひとつにするための土台が据えられている。わたしたちを神の子として生かす恵みの土台が据えられている。古いわたしは十字架でキリストと共に死に、新しく神と共に生きるわたしが恵みによって創造されてゆく。神の霊に導かれ、御言葉によって裁かれ、励まされ、生かされて、召された兄弟姉妹と共に生きる道が備えられる。この神の真実を、わたしたちの真実として生かされるように、主の愛による一致をパウロは祈り願っているのです。どうか同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いをひとつにして、わたしの喜びを満たしてください、そうへりくだって願うのです。

お祈りいたします。